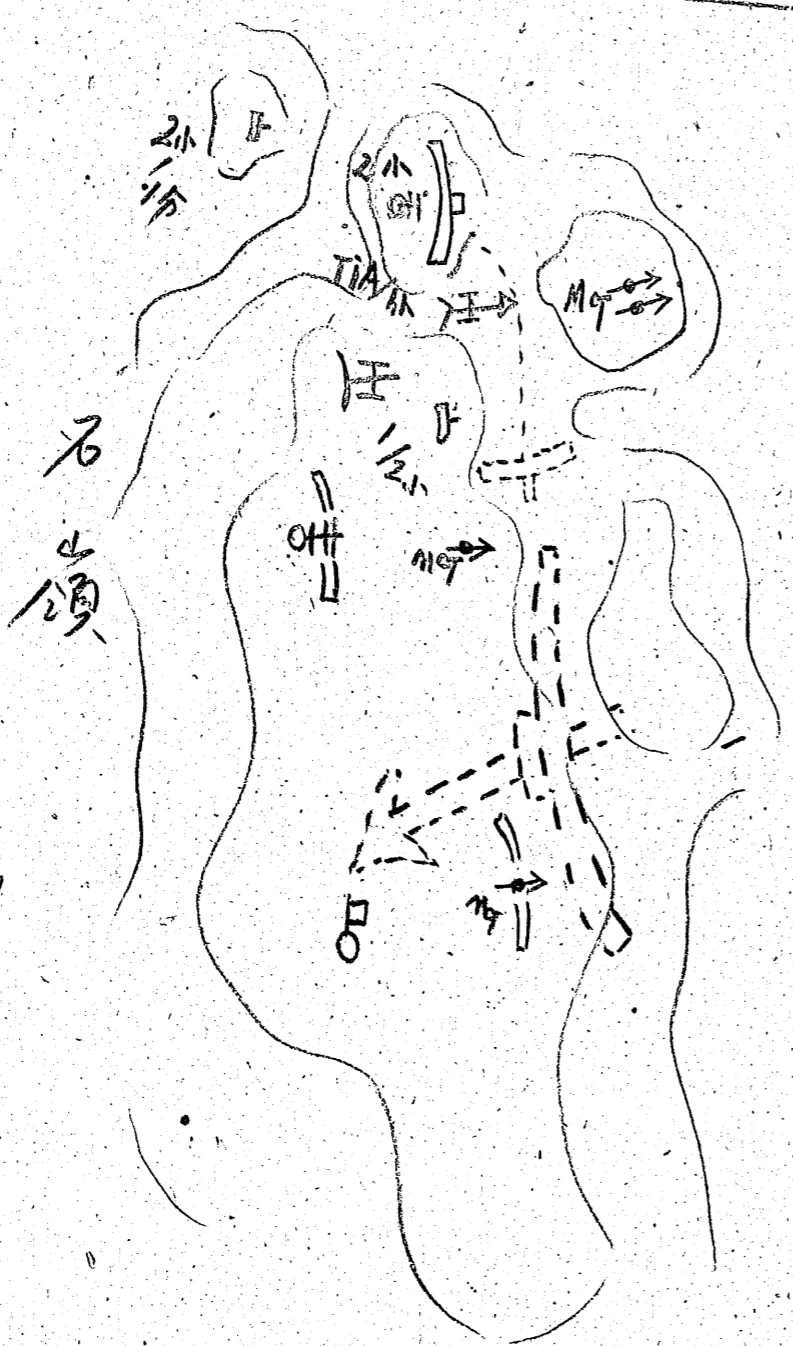
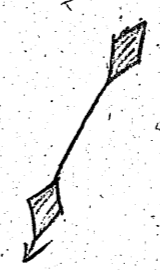
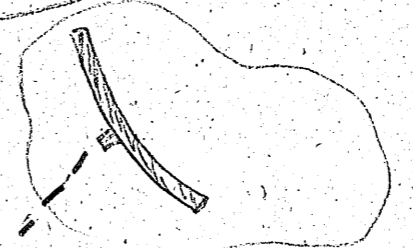


石嶺地区  
步兵中队战斗概要

自五月五日  
至五月十六日



守備  
八日

石嶺

附表

第三軍戦力損耗状況

一、人員

敵上陸前ノ給養兵額

七二〇口

五月二十日ノ實情

二五〇口

戦死

戦傷

行方不明

三〇〇口

二、火器

五月二十日ニ於テ残存数

作戦開始時保有数ノ比率

野砲級以上

九五

60% (洞窟火砲運用適切)

迫撃砲

一口

60%

MG

三、彈藥

當初ハ一倉戰方ヲ保有シタレ

五月二十日ニ於ケル保有数ハ概テニ基数ニテ野山砲ハ約六

基数ナリ

但シ各所ニ散在シテ

五月二十日ニ於ケル各部隊ノ兵力

24

二七〇

5

五〇口

22

九〇口

32

一二〇口

89

一七〇口

工砲

三〇口

620 五月十日ニ於テ戦力殆ト消執ニ詳細不明

海軍

一〇〇〇〇

軍直

四〇〇〇

輸送隊

一〇〇〇

直轄

一〇五〇

左地区

一〇〇〇

右地区

五〇〇

☆

二五〇

44MBs

野 兵 2

一九八

病馬廠

一七三

兵 勤

六七

輜

五八

一〇〇〇

沖繩作戰を回顧して

此の一編を沖繩作戰參加の部隊散華勇士に捧ぐ  
眠るが如く静かに明け静かに暮れる深緑の島・沖繩本島に我々が進駐し  
たのは眞紅の佛桑花の咲き誇る昭和十九年七月十二日・廣漠・一際千里  
緑と野花に色どられた滿洲大陸より果しなき海原の只中本土、台湾の中  
間に浮ぶその名も琉宮にふさはしい琉球の島に、轟々爆音をあげ鐵軌にて  
第一步をふみしめしは、緑の島々・青き海原淺緑の大空・世界の動  
亂を外に恰も桃源の夢の如く、盛夏の炎天下・南國情緒豊かな那覇港で淋  
りと流れる汗を拭きつゝ、愛車を沖繩の土に下せし時の喜び如何時に世紀  
を飾る一頁にはあらずや・バナとパイアの村宜野灣に進駐・沖繩縣  
民の熱溢るゝ歓迎様に整齊として甲車ははく進す。愛車の整備終れば憩  
ふ暇もなく首里・末吉の陣地構築・北邊より熱地の沖繩に來りて直射日  
光の如何に烈しきかを身に於て明け易き夏の朝・日の出を作業場にて拜  
し鐵器を振ひ精魂を投うつての作業も過々として進まず。  
暑熱と激働に身は疲れ果て上玄の月を仰ぎて宿舎に急ぐ。斯くの如き日

は果して幾日続くぞや・勤勞奉仕の女學生・勞務者の勞働は漸く作業効率を助成す。引き續き中城村上原附近の待機位置の作業・美里村附近の陣地構築・豊見城陣地構築と目まぐるしい一日一日は一刻の裕余も與ふることなく流れてゆく。

されど荒まんとする心も自然の美觀・緑の山岩礁をかむ波・温き縣民の慰めの樂しき一時にて安んぜられる。

十月十日高雲所々に飛來する朝・静かな夢を破つて警鐘は鳴響いたお、  
一・空を壓して來るは敵機グラマンの大編隊群・手をかへず暇もなく北中飛行場・小緑飛行場に天を冲する爆煙と地軸を揺がす爆發が起つた。  
空襲……

遂に南西の島々にも敵機の洗禮を受く、次々と急降下の敵機は我が對空砲火の中を舞下つて行く。紅蓮の火の玉となつて落ち行く敵機・黒煙長く引きつゝ永遠に歸へらざる海中に消えゆくグラマン

那覇の港灣に敵機が導かれるや大小の船舶は必死の對空戦闘を續けた

たるも涙をのんで海底の華と散つた。

那覇の市街は一瞬にして火の海と化し微風に乘つて火の手は全市街を蔽ふ・宵闇迫る頃燃え盛る市街と爆發する脂油燃料とは赫々として天目のかへり來るが如し。

家を失ひ・食は無し・親を・子をそうして夫を・妻を・あてどもなく探し求める戦災者の姿こそいたまじきかな。我々は率先彼等戦災者に温き手を延べたではないか・数日間那覇は燃え續け有を無に歸してしまつた八百機のグラマンはかくも恐しきものか・否、一・科學の威大なるを感ずるのみであつた。

空襲後中城村上原に移駐す。十月中旬郷土護持に燃え身を挺して初年兵入隊す。

昭和二十年の元旦を迎ふ。新春早々 B29 は銀海賊の如く高々度の上空を飛翔せり。硫黄島の玉碎を耳にした時に我々は如何に感したか・胸中深く秘めるものがあつたではないか。

三月二十三日此の日こそ沖繩作戰参加者の永遠に忘れる事の出来ない日であらう。空を蔽ひて大空軍は又もや沖繩を襲ふ。之が沖繩作戰の前奏曲だとは誰が想像したであらうか。翌二十四日敵艦隊は本島東南海面に現出し艦砲を以て我を壓し來る。二十五日慶良間列島に星條旗は一步を踏みしめた。刻々迫るは本島に對する上陸である。最早疑ふ余地はない。千四百余隻の艦船に數千の飛機海を壓し空を蔽ひて迫る。四月一日數百の舟艇は本島西海を埋め盡し人類文明の粹を集めし科學兵器を以て空陸海より立体的に迫り來る。將に世界注視の裏に十萬の日本軍精銳と物量を誇る數十萬の米軍との戦ひの幕は切つて落された。天文學的物量は山を谷と化し谷を埋め盡し草木悉く地上より爆碎されて一片の綠葉すら残さず。血肉を以て染めし首里北方戦線はさながら生ける修羅場と化した。肉弾と化學物量の戦は將に慘烈極りなし。數世紀本島を支配せし首里城も今や見る跡もなく廢墟とし一寸の余地な

き大小砲爆彈の彈痕は蜂集の如し。車輛の行動は勿論。人の行動をも自由にならず。轟々たる爆音と地軸を搖がす炸裂音は空陸より終日終夜絶ゆることなし。

おゝ此の修羅場の中を爆藥抱いて敵彈を縫ひつゝ、自が戦友の屍を越え、敵陣へとにじりよる神兵よ。心を限りに如何ほど成功を祈りしか。

昨日は懐しき戦友を堅き搦手で見送りて、今日は「さらば」で送られる只々燃える愛國の一念は凝つて敵中深く挺進して行く。必成を期し必死の切込の不舍を敢へて誰か論ずる。

連夜特攻隊は熾烈なる彈幕の中を敵艦に突入して行く。

神人一如自から様を正さしむ。部隊は宮城附近の守備より哨れての總攻環に参加中央部の敵の堅陣に染木し美事決死の突入は敵第一線を突破し中突進隊に協力して棚原高地の奪取を敢行した。第一戦隊は傳令一名歸送したのみで全員玉碎をした。時恰も五月四日朝まだき

軍の戰略持久に當り石嶺附近の陣地を占領せば限りなき敵の鐵量は大々

と人命をうばい愛車を破壊して行く。  
而して五月十七日敵の攻撃を全力を以て撃退し・山口中隊及び配屬高橋中隊  
は玉碎し他隊又隊長以下多数の犠牲を出し聯隊の戦力は全く減少せり  
「聯隊は現在地にて玉碎を期し石嶺附近を死守す」の部隊長の堅き一言  
は未だ昨日の如く感ぜられずや。  
五月下旬迄・特編大隊・獨速少隊・獨機少隊の配屬にて固守するを得た  
り。四〇、一、二〇〇米の間合にて敵と對峙し連日手榴弾と自動火器の戦  
闘と夜間の切込を以て戦ひ抜いた尊き血を以て二千二百の敵兵を倒し三  
十輛の戦車を血祭にあげた切衝の力は破れ軍は本島南端にて新編作戦  
を行ふに決せり。

道なき泥濘を疲れ果てた我々は敵弾をくぐりつゝ神里に向つた。そうして  
て神里で軍主力の收容に任し第一前進部隊となり最後迄敵と接觸して戦  
つた。そうして完全に部隊は消耗したてはなにか・米須に集結した人員  
三十一名それに傷者の來る者を以て最後の抵抗を試みた。兵器は損耗し

糧食を全くなく殘存者は疲れ果てそうして米須より轉進し其は夜襲に敢行  
する時は來た。時將に六月二十二日最高指揮官牛島中將を始め各兵團長  
幕僚は自決せり・最後を飾りし日本武人の精華なり。此に於て一部殘存  
者の切込を行ふ外沖繩の組織的戦闘は終末をつげた。

あゝ敢闘すること九旬・肉弾と精魂を以て戦ひ抜いて我に利あらず。  
そうして八月十五日月細夜大平洋上余韻淋しく休戦ラツパは鳴響いた。  
沖繩に眠むる戦友よ・二回の感狀と一回の賞詞が君等の血と魂の働によ  
つて部隊の上に輝いた。悠冥相隔つるとも我々の腦裏より永遠に消えな  
いてあらう・月は移り日は流れて永遠の彼方へ移れど・君等の誠は永遠  
に沖繩と共に消えないてあらう。

我が戦友よ・我が同胞よ・謹みて御冥福を祈る。  
そうして我々は起つた。起つて新日本の再建に敢へて進まう。  
おゝ 去年の激戦一夢春の島

昭和二十一年六月沖繩作戦一周年に際して

醜敵締帶南西地  
飛機滿空艦壓海  
敢鬪九旬一夢中  
萬骨盡枯走天外

昭和二十六年六月二十一日

長中將源景楠



在沖繩本島(含本島周邊小島)部隊轉用一覽表

第三十二軍總務管理班  
昭二二年十月十日調製

轉用地	部	隊	同	有	名	部隊通稱號	轉用年月日
西部軍	第三二軍司令部				球	一六二六	一九二二
東部軍	第三二軍防衛築城隊					一六二六	一九二二
關東軍	第三二軍養成自動車隊					一六二六	一九二二
關東軍	第三二軍舟艇班					一六二六	一九二二
西部軍	第三二軍兵器勤務隊					一六二六	一九二二
關東軍	第三二野戰會務隊					一六二六	一九二二
關東軍	第三二野戰兵器隊					一六二六	一九二二
西部軍	要塞建築勤務第六中隊					一六二六	一九二二
西部軍	要塞建築勤務第七中隊					一六二六	一九二二
西部軍	第二野戰築城隊					一六二六	一九二二
西部軍	第四九兵站地區隊本部					一六二六	一九二二
現地	陸上勤務第八三中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備隊二二三中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備隊二二四中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備隊二二五中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備工兵第五〇二中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備工兵第五〇三中隊					一六二六	一九二二
現地	特設警備工兵第五〇四中隊					一六二六	一九二二
中部軍	第二七野戰勤務隊本部					一六二六	一九二二
關東軍	野戰作并第一四中隊					一六二六	一九二二
關東軍	野戰作并第二〇中隊					一六二六	一九二二
現地	獨立自動車隊第一五中隊					一六二六	一九二二
現地	獨立自動車隊第二五九中隊					一六二六	一九二二
現地	電信隊三六聯隊					一六二六	一九二二
現地	獨立工兵第六六聯隊					一六二六	一九二二
東部軍	戰車隊二七聯隊					一六二六	一九二二
東部軍	獨立機關銃第三大隊					一六二六	一九二二
東部軍	獨立機關銃第四大隊					一六二六	一九二二
東部軍	獨立機關銃第一四大隊					一六二六	一九二二

東部軍	獨立機關第一七大隊	球	二四七	一九五三
西部軍	獨立速射砲第三大隊	"	六四〇	一九五三
北部軍	獨立速射砲第七大隊	"	六七〇	一九五三
	獨立速射砲第二二大隊	"	五五七	一九五三
	獨立速射砲第二三中隊	"	一三三	一九五三
	獨立速射砲第三二中隊	"	一四七	一九五三
	機關砲第一〇三大隊	"	二二七	一九五三
	機關砲第一〇四大隊	"	二四三	一九五三
	機關砲第一〇五大隊	"	二五二	一九五三
	第二一野戰高射砲隊司令部	"	二五五	一九五三
中部軍	野戰高射砲第七九大隊	"	二七二	一九五三
	野戰高射砲第八〇大隊	"	二七三	一九五三
	野戰高射砲第八一大隊	"	二八二	一九五三
	獨立高射砲第二七六大隊	"	二九一	一九五三
東部軍	獨立步兵第二七二大隊	"	一四七〇	一九五三
中部軍	獨立步兵第二七三大隊	"	一四三三	一九五三
西部軍	沖繩憲兵隊			
西部軍	沖繩聯隊區司令部			
西部軍	沖繩陸軍病院	球	一八二〇	
	第五砲兵團司令部	"	九〇〇	
關東軍	砲兵情報第一聯隊測地中隊	"	一八二二	二〇一四
	野戰重砲兵第一聯隊	"	四〇一	
關東軍	野戰重砲兵第二三聯隊	"	五〇九	
	重砲兵第七聯隊	"	四九二	
東部軍	獨立重砲兵第一〇〇大隊	"	一八〇四	一九五三
	獨立白砲兵一聯隊	"	五六六	
	獨立迫擊砲第三中隊	"	一三三	一九五三
	獨立迫擊砲第四中隊	"	一三九	一九五三
	獨立迫擊砲第五中隊	"	一三九	一九五三
	獨立迫擊砲第六中隊	"	一四九	一九五三

銃

獨立迫擊砲第七中隊	球	一三〇〇	一九五三
獨立迫擊砲第八中隊	"	一三〇一	一九五三
獨立迫擊砲第九中隊	"	一三〇二	一九五三

獨立白砲口一聯隊	"	三六六六	一九八二
獨立迫擊砲第三中隊	"	一三三九	一九八一
獨立迫擊砲第四中隊	"	一三三九七	一九八一
獨立迫擊砲第五中隊	"	一三三九	一九八一
獨立迫擊砲第六中隊	"	一三四九	一九八一

獨部軍	獨立迫擊砲第七中隊	球	一三三〇	一九八一
	獨立迫擊砲第八中隊	"	一三三〇一	一九八一
	獨立迫擊砲第九中隊	"	一三三〇二	一九八一
	獨立迫擊砲第一〇中隊	"	一三三〇三	一九八一
	獨立迫擊砲第七二中隊	"	一三三〇四	一九八一
第二十四師司令部		山	三四〇〇	一九八一
步兵第二二聯隊		"	三四〇一	一九八一
步兵第三二聯隊		"	三四〇二	一九八一
步兵第八九聯隊		"	三四〇三	一九八一
野砲兵第四二聯隊		"	三四〇四	一九八一
工兵第二四聯隊		"	三四〇五	一九八一
特務第二四聯隊		"	三四〇六	一九八一
輜重兵第二四聯隊		"	三四〇七	一九八一
第二四師團通信隊		"	三四〇八	一九八一
第二四師團兵器修補隊		"	三四〇九	一九八一
第二四師團野戰防務給水部		"	三四一〇	一九八一
第二四師團第一野戰病院		"	三四一一	一九八一
第二四師團第二野戰病院		"	三四一二	一九八一
第二四師團馬車隊		"	三四一三	一九八一
第二四師團衛生隊		"	三四一四	一九八一
第六二師司令部		石	一八八二	一九八一
步兵第六三旅司令部		"	一八八三	一九八一
獨立步兵第一一大隊		"	一八八四	一九八一
獨立步兵第一二大隊		"	一八八五	一九八一
獨立步兵第一三大隊		"	一八八六	一九八一
獨立步兵第一四大隊		"	一八八七	一九八一
步兵第六四旅司令部		"	一八八八	一九八一